

令和4年度第2回図書委員会読書会 報告

- 1 日時・場所 令和4年12月5日(月)放課後 本校図書館にて
- 2 テーマ 旧約聖書ヨナ書 新約聖書ルカによる福音書15章
- 3 なぜこのテーマを選んだか

図書委員会読書会は、ここ数年世界と日本を交代で扱ってきた。アメリカ(オー・ヘンリーとフォークナー)、日本(安岡章太郎と坂口安吾)、ドイツ(ヘッセ)とフランス(ジッド)、日本(原民喜と大江健三郎)。今年度は世界の番だ。7月は古代ギリシア哲学(プラトンの『クリトン』)を扱ったので、12月はヘブライズムを扱うことにした。西洋の文化の淵源はヘレニズム(ギリシア文化)(ラテニズムを加えてもよい)とヘブライズム(ユダヤ・キリスト教)だから、これを押さえておくことは、西洋を理解することになるばかりか、すでに西洋化した私たち自身の自己理解にもなる。ゆえに、旧約聖書・新約聖書を扱うことはまことに意味がある。では、そのうちどれを扱うべきか? 図書委員長らに聞いたら、創世記神話を挙げた人がいた。アブラハムの召命を言った人もいた。新約聖書ではマタイによる福音書の18章を挙げた人もいた。だが、創世記は長く、切り取りにくい。ヨナ書なら短く、扱いやすい。内容も新約聖書に通じるものがあり、入門としては悪くない。また、マタイの18章は、それとほぼ同じものがルカ15章にある。比較すると、マタイ18章の方は教会員のための戒めで、ルカ15章の方がより社会の中での教えである。(パリサイ人や律法学者に対する戒めであり、現代日本社会に広く応用できそうだ。)こうして、ヨナ書とルカ15章を扱うことにした。テキストは新改訳を用いた。

4 参加者

1年5人、2年2人、教師1人。コロナで欠席多数となったが、よい読書会は顔の見える少人数で始めて可能だ。その意味では適正な人数と言うべきだろう。(昔、全国の読書会甲子園の偉い先生が、読書会を通じ読みが変わり自己開示と自己変容が出来るためには、4人が適正、と言っておられた。)

5 進行

第1部でヨナ書を扱い、休憩後第2部でルカ15章を扱った。テキストを読み、各自感想や意見を交換するスタイルで行った。

6 事前のレクチャー

旧約聖書はモーセ五書をはじめとして、歴史、詩、預言からなる。ヨナ書は小預言書と呼ばれる。新約聖書も歴史(福音書・使徒行伝)、手紙、預言(ヨハネ黙示録=啓示)という構成を持つ。(塚本虎二による。)(なお、ユダヤ教の聖書だけを奉じるのがユダヤ教、新しい契約を示した新約聖書を奉じるのがキリスト教。それらに加えコーランを奉じるのがイスラム教。コーランではなくモルモン経を奉じればモルモン教、原理講論を奉じれば統一教会ということだろうか。)

古代ユダヤ人はアブラハムの時メソポタミアからパレスチナに移動し、その子孫はエジプトで栄えたがやがて奴隷状態となり、モーセの時出エジプトをした。ダビデとソロモンの時王国は栄えたとされる。その後北イスラエルと南ユダに分裂、北はアッシリアに滅ぼされた。南はバビロニア捕囚の憂き目に遭った。ペルシアによって解放され、神殿を再建した。紀元前後ローマの支配を受ける中でイエスが出現、イエスの死後新約聖書が書かれキリスト教が成立した。4世紀にローマにより公認されやがて国教化された。

7 ヨナ書 Book of Jonah

ヨナは神のお召しを受けアッシリアという超大国の巨大な都ニネベに行き悔い改めを迫るよう命ぜられる。が、遠くに逃げようとした。が、嵐に遭い海に投げ込まれ魚の中で3日を過ごし、ついにニネベに行くことに。悔い改めを迫ると、ニネベの人々は改心した。神は許した。ヨナは納得がいかない。神はヨナに「私もニネベの人が惜しいのだよ」と説明する。

この話は、異邦人に対して宣教し悔い改めを迫るので、バビロン捕囚(紀元前6世紀)以降に作られた話だろう

とされている。3日間魚の腹中にいたのはイエスが3日間墓にいたのと同じ。神が許すのも新約聖書と同じ。

「ヨナはすごく人間味がある。お召しから逃げたり、神に祈ったり、不平を言ったり」「ニネベの人に断食を要求するのが分からない」「ヨナは神の怒りに触れつつも『恵み深き主』と祈るのはなぜ」「ニネベの人に断食をさせる一方でヨナには意図を説明するのはなぜ」「預言者はすごい人かと思ったがヨナは自分たちに近しく人間味がある」「ヨナは悔い改めを叫ぶが、現代社会でそれをやったら奇異な目で見られる。ニネベの人がすぐ信じて改心したとは」「ノストラダムスの大予言を思い出した。文化としての宗教はいいけど狂信的なのはどうか」「ノストラダムスはルネサンスころの思わせぶりな言い回しをする詩人の一人だろう。五島勉が日本でベストセラーにした。終末論的ユートピア思想は、ヘブライズムだけではなく、実はインド系の宗教や、大本教など日本の民間宗教にもある」「神はヨナに対して丁寧に説明する。ニネベの人に対してもあらかじめ説明していたのか」「断食をどう考えるか。神には伝えたいことがあったに違いない」「王は町の噂を聞いて改心するが、そんなことは無理では」「ギリシア神話だと神々が人間同様欲に充ちているが、ユダヤ教では神は人間に対して丁寧な配慮をしようとする」「イザナギ・イザナミの話も人間くさい」「宗教は他を助けたりもするが他の命を奪うこともある」「ニネベの人々は神に背き人間の欲ばかり求めていたが、それが罪深いとどこかで知ってはいたから、すぐ改心したのかも」「自分たちだけの神ではなく異邦人も含めた神だ、また神は譲り、神は許す、というのが面白い」

(この話は、ニネベの人が許されるので、過度の選民思想を戒める話でもある。)

8 ルカによる福音書 15章 Gospel of Luke 15

イエスが罪人たちと共にいたので、律法学者やパリサイ人が非難した。それに答えた話。A話は99匹の羊を置いてでも見失われた1匹の羊を探す話。B話は9個の銀貨を置いてでも失くした1個の銀貨を探す話。いずれも見つけると嬉しい。C話は、放蕩息子(弟)が久しぶりに帰還したら父が喜んだ。兄が嫉妬して不平を言ったら、父はそう言うな、となだめた。既成の価値観・社会体制で抑圧され排除された人を神は見捨てない、探し求める。また、パリサイ人や律法学者らは、人を批判するほどえらいのか、と反省を迫る話。

「99対1の発想は大事だ。最後の1を大事にしなければならない」「銀貨を見つけた話なら今の高校生にもわかりやすい」「その後弟がどうなったかは書いていない。財産は兄のもので、弟は歓迎パーティーだけで終わるのか」「兄が嫉妬するのもわかる。自分は真面目にやってきたのに、サボっている人が大事にされるなんて、理不尽だ、と」「遊蕩しても結果、いいことはないとお互いは知っている」「現代社会は真面目一本でいけるのか」「ぶどう園の労働者の日当のたとえ話もある。朝から働いても夕方から働いても報酬は1デナリ。だが、天国で報われるとはそういうものだから、それでいいのでは」「律法学者やパリサイ人は、自分は気高くエライ存在だとうぬぼれ、傲慢だ。キリストは分け隔てなく誰とも接する」「神は人間の傲慢を砕く。バベルの塔の時もそうだ。砕かれてなお神に祈り求める者は神に答えて貰える」「プライドや誇りはどうなる」「それはあまりいらぬということか」「ささいな決まりを守っているからと言って偉いわけではない」「ニーチェ氏は強い人だが神に乗っていてもっと強くなれたら、と内村鑑三が言っている」「放蕩息子が歓迎されるのがやはりわからない」「今の時代なら親子の縁を切るケースもあるのでは」「仏教にも、家出した放蕩息子に対して、父親が少しずつ試練を与えて修行させ導く、というのがある」「アメリカでは人は間違うものだから、他人を責めるな、と教えるそうだ」「いや、日本にも恕(ゆるす)という教えはある。伊藤仁斎は恕が愛に通ずる、仁は愛だ、と言っている」「今の日本では芸能人の不祥事を皆で上から目線でたたくケースがある。まるで自分は間違いのない人間だとでも言うように」「その手のバラエティはひどい」「そういう意味では各種マスコミも信用できない」「ネットニュースはもっと信用できない」「マスコミを信頼できるものにするには」「マスコミ人は木鐸であるべきだ。売ればいいのではない。言論・思想の自由も大事だ」「人に流されず自分の目で見て自分の頭で考えることは大事だ」「キリスト教は一人一人の人間をそれぞれつかむ。武士団の心中死のように共同体が団子になって集団自殺する、とうのではない」「最大多数の最大幸福、という思想では、大事なものが抜け落ちる。どの一人も大事だ」

9 感想

少人数の読書会特有の熱気が出て結構面白かった。なかなか鋭い発言もあった。全部を紹介できず残念だ。西洋人と話すにはキリスト教くらい知っているべきだ。今からでも触れてみよう。